

ELE 教育の近年の動向

江 澤 照 美

Tendencias actuales de la enseñanza de E/LE

Terumi EZAWA

1. はじめに

ヨーロッパ共通参照枠（以後、MCER と略記）とセルバンテス協会の『カリキュラムプラン』（以後、PCIC と略記）は前世紀までの「外国語としてのスペイン語教育」（以後、ELE 教育と略記）を大きく変えた。教育機関や教材出版社の MCER と PCIC への対応は比較的迅速で、以後カリキュラムや教材のレベル設定や内容が見直された。筆者は当地開催の ELE 教師向けイベント情報を調べ、またそのうちのいくつか実際に参加しているが、新しいカリキュラムや教材の MCER および PCIC 準拠は業界内では定着したとみている¹⁾。MCER や PCIC により比較的短期間に大がかりな ELE 教育の改革をなしとげたスペインは、広大なスペイン語圏諸国の中でも ELE 教育の最新情報を入手できる場である。よって筆者のようにスペインから遠く離れた地域で ELE 教育に従事する者にとって現地に赴き ELE 教育関係の現状を知り、情報収集を行うことは非常に有益なことである。

他方で、近年ますます発展をとげるネットの恩恵にあずかり、遠く離れた国のイベント情報の中には、セルバンテス協会や ELE 教育機関、教材出版社が発信するメールやブログ、SNS などにより日本にいながらにして入手できるようになったものもある。また、ネット検索によりスペイン語圏の社会・文化情報を入手する機会が増えた。PC やタブレット、スマートフォンを駆使してネットから授業用の資料を探してきたり、自分の研究に役立つ情報をサーチしたりするのは今や当たり前のことになった。何年前か前までは、教室でスペイン語圏のある文化に関係する事物を紹介するために事前に手持ちの蔵書から適切な画像などを探していたことを考える

と、スペイン語圏から遠く離れた地域で ELE 教育活動を行う教師でも、高額なコストをかけずにスペイン語圏についての情報収集ができるようになったのは非常にありがたいことである。

ICT の恩恵に浴するのには語学教師だけでなく、学習者も同様である。通信を利用した学習など少し前までには簡単にできなかった学習が現在ローコストでできるようになっている。

以上のように、今世紀に入ってスペインの ELE 教育界は MCER や PCIC という指針を持ち、さらに ICT の活用によりスペイン語圏以外の地域の学習者をも想定した教育を展開している。最近 AVE から AVE Global に名称変更したセルバンテス協会の通信教育システムもその一例と言えよう。

さて、このような ELE 教育界でここ数年来注目されているのが脳科学や心理・神経言語学の分野からの教育的アプローチである。後述するように筆者がスペインで参加した ELE 教育系のワークショップやイベントでは上記の分野の専門家の話を聞く機会があり、学習者の五感に訴える教材開発や授業実践の報告も散見した。近年の ELE 教育界が学習者の能力を引き出すために人間の脳の働きや感情の表出に注目しているという事実は筆者にとって大変興味深いものであった。

しかし、MCER や PCIC による教育の改革や ICT 活用という明るい展望を持つスペインの ELE 教育界で、教師たちが学習者のモチベーションを高めるという相変わらずの課題に取り組んでいる現場を見て、モチベーションの問題解決の難しさをあらためて思い知らされた。そして、筆者自身この問題を解決するための名案を持ち合わせていないが、生徒のような立場になってワークショップに参加したり、最新の ICT を活用した授業を経験したりすることで、従来の授業とは形態が大きく異なる近年の新しい授業にもやはり欠点や問題点があり、その結果学習のモチベーションが下がることもあると思うに至っている。

そこで本稿では、MCER 以後（特に PCIC 刊行から現在に至るまでの時期）のスペインの ELE 教育界における教育・学習・評価の変化のうち、ICT の導入と関わる近年の動向をふりかえりつつ、新しい授業の試みで評価できる点とそうとも言えない点を指摘し、学習者のモチベーション維持のためのささやかな提案を試みたい。

2. MCER 以後の ELE 教育界

MCER はその正式タイトル名が示すように「外国語の学習、教授、評価のため」に作られた。したがって、ヨーロッパ各国が MCER を自国の言語教育の指針づくりに役立てることを目指しているのであれば、現在各言語の学習・教授・評価それぞれの分野で MCER 以前の時代とは異なる状況が生じているはずである。この仮定にもとづき、本章では近年のスペインにおける ELE 教育界の動きを、「学習」「教授」「評価」の分野別にまとめてみた。これら三分野の中で中心的な役割を果たす者は異なっていて、「学習」では学習者、「教授」では教師、そして「評価」においては個々の学習者や教師も無関係ではないが、MCER を参照した評価基準づくりに関与するのは個人よりは教育機関や団体などの教育関係集団である。

以下、分野別に述べるが、MCER のタイトルとは異なり、本稿では「教授」「学習」「評価」の順に取り上げる。まず筆者自身に関わる「教授」に注目し、続いて「教授」の対象である学習者の「学習」に目を向ける。「評価」は最後に考察を行うが、特に MCER と密接に関係する「評価」は個々の教師が行う試験よりはむしろ DELE のような公的な検定試験と深いつながりを持つ。すなわち、個々の教師は検定試験対策活動に従事することはできても、試験内容の改善に直接関与できない。ただし、検定試験は実施母体である公的機関によってその内容がある程度公表されるので、「評価」は比較的観察しやすい分野であるとも言える。

2.1. MCER 以後の「教授」（教育）

1 章で述べたように本節では特に PCIC 刊行以後の ELE 教育界の動向に言及する。

2.1.1. 教育機関の役割

MCER は学習（者）や学んだことへの評価について私たちに多くの示唆を与えたが、それ以上に個々の教師や教育機関の教育方針に多大なる影響を及ぼした。MCER の第 6 章第 3 節では言語教育の仕事に携わる者の役割が定義づけられている。教師対生徒という関係だけでなく、試験・資格検定に関わる者や教科書執筆者、授業コース立案者などの専門化の存在にもスポットを当て、関係者全員の協力が言語学習促進につながることを

教師のみならず教育機関の関係者にも意識させたのは MCER の功績の一つと言えよう²⁾。

MCER は汎言語的な枠組みであるため、個別言語の学習・教育・評価の基準を定めるのに直接役立つものではない。個別言語の基準作りはあくまでも MCER をよく理解しつつ、個別言語の教育について十分な知識と経験を有する MCER の利用者に委ねることが必要不可欠であった。そこでスペイン語については、スペイン語教育の専門家(集団)である MCER の利用者がスペイン語の学習・教育・評価の基準案を作れるように、基準作りの基礎となる分類案を最初に作成したのがセルバンテス協会であり、その完成作品が PCIC である。この場合、MCER の利用者とは MCER 第 6 章で言及されている生徒以外の関係者、特に教育機関の授業のコースやカリキュラムの作成者を指す。

MCER は個々の教師以外の教育関係者の存在や協力が学習者に必要であることを明らかにしたが、それを受けて PCIC もその利用者として個々の教師よりも教育機関を想定している。

2.1.2. 教員養成センター (CFP)

PCIC が刊行された頃からセルバンテス協会は「教員養成センター」(Centro Formación de Profesores、以後 CFP と略記する)を立ち上げ、現職の ELE 教師や教職志望者向けの講座を開講した。筆者が所有している 2006-2007 年と 2007-2008 年の CFP パンフレットによると、講座の内容はスペイン語学・文学、スペインの文化、教授法、教室運営、DELE など多岐にわたる。期間も十数時間で終わるものもあれば修了まで数週間に及ぶものもある。開催場所はマドリード市内およびアルカラ・デ・エナーレスの協会本部が大半であるが、国内他大学と共催することもある。2008 年にスペインに長期滞在していた筆者は当時開講されていた PCIC 関係の講座の他、語学や教授法関係の講座をいくつか受講した。マドリード近辺在住者でないとならば数週間も続く長期の講座の継続的な受講が難しいが、二日間程度十数時間で終わる講座は短期のマドリード滞行者にとって利用しやすいものであった。

CFP 講座は現在も開講されていて、年度ごとの講座の詳細は Centro Virtual Cervantes の HP から閲覧や申込みが可能である³⁾。2016 年開講の講座情報の一覧を眺めてみると、筆者がスペインで受講していた 2008 年

当時に比べて、通信制の講座開講数が増加している。教育や語学関係にも通信制が増えてきたが特に顕著なのが DELE や AVE Global 関係の講座開講である。開講形式については、指定された開催場所への出席と通信を併用する講座 (semipresencial) も見受けられる。通信環境さえあればスペインに行かなくても受講できる通信制講座の増加は受講生にとっては大変望ましい受講環境の好転である。それは同時にこれからの時代に ELE 教師として研鑽を積むことを望む者がネット環境を利用した学習に習熟する必要性に迫られることをも意味する。

2.1.3. 「学習者中心」の授業へ

「教師中心」の授業から「学習者中心」の授業への転換は教師に根本的な授業内容や教授法の変更を要求した。このような動きは MCER のもとで新しい外国語教育のあり方を模索するヨーロッパのみならずアメリカ大陸でも、そして日本でも拡がりを見せている。本節では筆者がスペイン滞在時に参加した ELE 教育関係イベントの報告から「学習者中心」の授業や教育活動について考察する。

江澤 (2010) においてスペインの ELE 教育教材出版社が果たす役割を指摘した。この時に言及したのは ELE 教育関係の学会における彼らの活動であったが、出版社の多くはそれ以外にも教育機関とのタイアップにより国内外でワークショップを実施している。各社サイトの教師用コンテンツを閲覧するためにメールアドレスを登録すると時折ワークショップ開催情報を送ってくるが、残念ながら日本でのワークショップ開催は非常にまれであり、スペイン滞在時に参加可能なイベントを探して参加するのが最も確実であるようだ。今回とりあげるのは近年筆者がスペインで参加した教材出版社主催の教育系のイベントであり、これらのイベントで言及された新しい教育の傾向に焦点を当てる。

2015年、2016年の3月に筆者はスペインで以下の3つの ELE 教育系イベントに参加した⁴⁾。

- ① “Energía ELE” (マドリード、2015年3月7日)
Edelsa 社と語学学校 Tandem の共催
- ② “XVI Encuentro práctico ELE” (マドリード、2015年3月13-14日)
Edinumen 社と語学学校 International House の共催

③ “XII Foro de profesores de E/LE” (バレンシア、2016年3月11-12日)

Difusión 社とバレンシア大学の共催

いずれの催しも数名のゲストスピーカーによるプレナリーセッションもしくは円卓会議と申込制によるワークショップで構成されていた。ワークショップは発表希望者が多数であることが多く、いくつかの教室で同時に開催される。①は比較的小規模の集まりであったので、教室入れ替え制でほぼすべての催しを体験できたが、②と③のワークショップは発表希望者多数のため、設置されたすべてのワークショップに参加するのは不可能であった。しかし、参加はできなかったものの発表タイトルや要旨からその内容が大体判断できるワークショップも多く、これに実際に参加できたワークショップでの体験を加えると近年のELE教育の指向が概ね理解できたように思う。

三つのイベントの傾向を総括すると、まず目立ったのが本稿第1章で述べた脳科学や心理言語学、神経言語学への関心の高さである。これらの分野に関しては、①ではサイコセラピストの Luis Muiño が *Inteligencia transcultural* という演題で、②では神経生理学者の Tomás Ortiz が *¿Qué aporta la Neurociencia a la formación para educar?* という演題でそれぞれプレナリーセッションを行った。また、③では Dayane Mónica Cordeiro と Laura Pérez Sanchis による *Múltiples puertas de entrada a la mente de nuestros alumnos: las inteligencias múltiples en el aula de E/LE* および Jane Arnold による *La enseñanza de E/LE : afectiva y efectiva* という題のワークショップ、さらに *Los factores afectivos para una enseñanza centrada en el alumnado* というタイトルで円卓会議が開催された。

脳科学など現在のELE教育界から注目されている分野について十分な知識を持っていないので、筆者は上記のプレナリーセッションの内容を自分が必ずしも十分に理解できたとは思っていない。しかし、対象とする学問分野は異なるものの、これを教育活動に応用するためにこれからの時代のELE教師は学習者の五感を刺激し、情動に訴える教室活動を考えていかなければならないということは理解できた。学習者のやる気を引き出すという課題は次項2.3.の「学習」にも関わるので、次項にて再度取り上げる。

人体に関係する科学分野以外に注目すべきELE教育界の動きはICTの活用である。②では Chema Rodríguez が *BlendedELE: entre profesor analógico*

y el digital のタイトルで、Santiago Campión が *El modelo flipped classroom y su aprendizaje de un idioma* のタイトルでそれぞれプレナリーセッションを行った。いずれもスペイン以外の地域でも注目されている新しい学習および授業形態である。

②で取り上げられたブレンディッド・ラーニング (Blended Learning) は集合研修とeラーニングを組み合わせ、双方のメリットを活かした研修・学習の方法で⁵⁾、2.2.2. で言及したセルバンテス協会主催の CFP 講座のうち講座出席と通信利用のセット受講が条件付けられている講座はその一例である。

反転授業 (Flipped classroom) は教室で行う授業と教室外すなわち自宅で行う宿題の役割を反転させた授業形態である⁶⁾。自宅であらかじめデジタル教材を視聴し、その後に行う授業では学習者はその教材の内容について知識を持っているという前提でクラスメイトと意見交換や協同活動などを行う。このような形態の授業では教室内の教師の役割も従来のほぼ一方通行的な知識の伝授者ではない。反転授業において教師はむしろファシリテーターとして行動することが期待される。

ブレンディッド・ラーニングや反転授業を導入すると教室で行うべき活動の内容が従来のものとは変わってくる。これらの新しい教室活動は日本でも注目されはじめていて、文部科学省 HP にも掲載されている⁷⁾。このような「学習者中心」の授業スタイルは外国語の授業に限らず応用が可能であるようだ。また、この文部科学省 HP の「(参考)「反転授業 (flipped classroom)」」のスライド型のページ右上に「「反転授業」はあくまでも教育方法 (pedagogy) の一形態。生徒の学びがより良いものになる場合のみ取り入れるべし。」と注意書きがあるように、現行の学校の授業のすべてを反転授業に変えることが文部科学省の方針というわけでもなさそうである。いずれにしても、このような授業形態に変更するのがよいか、あるいは従来のスタイルの授業がよいか、など教師がこれまでの自らの授業のあり方をふりかえる機会を持つことは必要であろう。

本節の最後に、近年の教育における ICT 活用の例として電子ポートフォリオとゲーミフィケーションについても述べておきたい。まず電子ポートフォリオについてであるが、③のイベントで Paula Lorente Fernández が電子ポートフォリオを活用した授業実践についてワークショップ *Más allá del papel. Uno de ePortfolios en la clase de lengua* を行った。電子ポートフォ

リオはうまく使いこなせれば非常に強力な教育支援ツールになりうるものであり、発表者の Lorente Fernández 氏はうまく活用する教育者の一人であると思った。ただし、筆者自身も本務校で電子ポートフォリオを利用して担当している授業のすべてで使いこなしているわけではなく、教師が相当のコンテンツを揃えないと学生の自主的な学びにつながるような活動に結びつかない。Fernández 氏のようにうまく電子ポートフォリオを使いこなしている教師の実践例について今後調査をする必要を感じている。なお、同氏の勤務校はスペイン国外である。

ゲーミフィケーションはスペイン語では *gamificación* と呼ばれる⁸⁾。多くの人々、特に若い世代をひきつけるゲームを問題解決や目標達成のための仕組みとして利用することで、ELE 教育の世界ではたとえば簡単な練習問題作成にゲームの要素をとりいれて、特に意識せずに利用者に学習をさせることを狙いとしている。筆者は Edinumén 社の無料ゲームアプリ *The Spanish Challenge* をスマートフォンに入れている。ゲームが好きでない人にはお勧めしないが、対戦モードで相手に負けると次は挽回したくなる筆者のような人間には向いているようである。適度に緊張感も生まれるので、こういう教材がもう少し身近なところで見つけることができればスペイン語学習も楽しめそうである。

2.2. MCER 以後の「学習」

MCER を推進するヨーロッパにおいて望ましい外国語学習者像を簡潔に言い表すとすれば、複言語主義、複文化主義を標榜し、生涯を通じて自分の母語以外の言語を学び続ける人、ということになるだろう。移民の流入が多い地域では街の外で相手と意思の疎通を図るために自分が持つ語学知識や相手の文化についての知識を可能な限り総動員し、それで足りなければ非言語的要素をも使えばどうにかなるかもしれない。どうにかならなくても自分よりも相手の言語や文化について知っている別の人が助けてくれるかもしれない。筆者は MCER を知ったことにより、その後に登場した ELE 教育用教材の中の会話やアクティビティの内容から、ヨーロッパで生活しながら身につけることを望まれる語学能力がどのようなものか多少なりともわかってきたような気がしている。おそらく筆者の理解はまだ浅いと思っているが。

MCER はその利用者として教師だけでなく学習者も想定している。し

かし、学習者に密接に関わりがあるいくつかの章でさえその独特の記述のせいで、一般の学習者には理解しづらいものになっている。したがって、MCER 以後の「学習」をどう継続していくかを読み取る一方で、学習者が学校などの学びの場を去ったのちも学習を継続し続けられるような「何か」を学習者に伝えるのは教師の役割のひとつであると筆者は考える。

ちなみにその「何か」に当てはまるものとは何であろうか。独学の方法、というのはその答えのひとつになるだろう。しかし、それだけではない。学習のモチベーションを上げる、あるいは維持するために、現在の ELE 教師たちが人間の脳や感情のしくみを解き明かす学問にヒントを得て生み出す様々なアクティビティは、それを経験した学習者の記憶に残り、言語学習を継続するのに役立つ可能性を秘めている。もちろん、学習者のモチベーションアップあるいは維持の問題はかなりの難題であるため、そのようなアクティビティさえ思い出せば学習を続けられる、と安直に結論づけるつもりはない。

さて、ここで人間の頭脳や感情を扱う学問から教育へのアプローチについて述べておきたい。筆者が個人的に話をした複数の ELE 教育関係者によるとこの分野が ELE 教師の興味を引き始め、脳の働きに関する研究結果が学会発表やワークショップで引用され始めたのは数年前ぐらいからの傾向とのことである。ところで筆者は2008年に UIMP で情感と ELE 教育の関係に関するワークショップに参加した経験があり、当時は他の ELE 関係の講座とは少し毛色の違った講座のような印象を受けた。しかし、2.1.3. で言及した神経生理学者 Tomás Ortiz の著作が2009年刊行であることを考えると、ELE 教育関係者が人間の身体的な働きなどに興味を持ち始めたのは今から数年前ではなくもう少し前からなのかもしれない。Ortiz (2009) は幼少期から青年期の間が発達する人間の脳の働きを解説し、記憶力、知覚力、計算能力そして情感を豊かにする教育について示唆している。

そして、現在脳や神経の働きについての知識と教育の関わりに多くの教育者が関心を抱いているが、とりわけ注目されているのが医学と神経科学博士の Francisco Mora である。Mora (2013) も Ortiz (2009) と同じく人間の脳の働きを知りその知識を学習や教育に役立てることを提唱し、そのような教育を Neuroeducación という言葉であらわしている。成人への教育にも役立つと思われる情感やエンパシーについての言及もあり、成人を教え

る ELE 教育者にとって参考になるところが少なからずある。

その他、教育関係の文献としては、ELE 教材出版社として知られる SM 社から Biblioteca Innovación Educativa シリーズが出版されている。また、未読のため文献名はここに挙げないが、スペインの大型書店で版を重ねている神経科学系統の教育学文献もあり、脳科学・神経科学などから教育や学習にアプローチを試みる研究は今後も注目に値すると思われる。

2.3. MCER 以後の「評価」

ヨーロッパの言語教育において、言語レベルを初級・中級・上級ではなくさらに細かく規定する共通参照レベルの考え方は MCER 以前より存在していたが、A1 から C2 までの 6 つの共通参照レベルや能力記述文は MCER によってヨーロッパ以外の地域にも広くその存在を知られるようになったと言える。MCER がまだ必ずしも十分に理解されていないヨーロッパ域外では共通参照レベルのみが MCER を代表する基準であるかのように捉えられている場合もあり⁹⁾、そのような誤解は早急に正されるべきである。

しかし、共通参照レベルの内容やその提示方法が MCER によって改善され、スペイン語における PCIC の登場によって教師や教育機関それぞれの教育環境に合わせた指針案が生み出されやすくなったと筆者は考える。そのように考える根拠はセルバンテス協会が今世紀に入ってから実施した DELE のレベルの見直しにある。

DELE は Básico (B1 相当)、Intermedio (B2 相当)、Superior (C2 相当) の 3 つのレベルしか設定されていなかった¹⁰⁾。しかし、MCER は ALTE (ヨーロッパテスト協会) の枠組みである ALTE Framework に準拠する形で A1 から C2 までの 6 つの共通参照レベルを設定した。それを受けてセルバンテス協会は受験級が存在しなかった 3 つのレベルを新規に設置し、同時に従来の 3 つのレベルの名称も変更した。すなわち、DELE A1 から DELE C2 までの名称に統一性のある 6 つのレベルの試験を行うことにした。新しい 3 つのレベルの試験は一度に開設されたわけではなく、DELE A1 は 2009 年 5 月に、翌年に DELE A2、最後に DELE C1 が設置されたことで 6 つのレベルがそろった。なお、PCIC の刊行は 2006 年である。そのことから考えると、MCER の登場が DELE のレベルの見直しの契機になったかもしれないが、スペイン語によるより具体的な指針作りの参考となる

PCIC の刊行こそが DELE のレベル見直しに大きく貢献したと考えられる。新しい DELE はその後 B レベルの難易度の見直しもを行っている。

さらに今年スペイン語能力検定試験 SIELE (El Servicio Internacional de Evaluación de la Lengua Española) の設置が公表された。スペインのセルバンテス協会およびサラマンカ大学とメキシコ国立自治大学¹¹⁾が関わるこの新しいスペイン語の試験は DELE と同様に MCER に準拠するが、従来の合否判定ではなく MCER のレベルに合わせた 1000 点満点のスコア制を採用し、設置レベルは A1 から C1 まで、有効期限が 2 年間に定められる、など従来の DELE とは異なる点をいくつか持つ。指定会場でインターネットを利用するこの新しい試験では読解能力・聞き取り能力・文章作成能力・口頭表現能力が問われ、結果が出るまでに数ヶ月を要した DELE とは異なり最長でも 3 週間という迅速さでスコアを受験生に届けられるとのことである¹²⁾。

なお、文章作成能力と口頭表現能力については一方通行的な発信だけではなく、双方向的な文章や発話のやりとりをする能力が問われる。MCER では従来の「読む・聞く・書く・話す」の四技能のうち、「話す」技能について話者単独での発話と双方向的なやりとりとを区別しているが、SIELE においては「話す」技能のみならず、「書く」技能においても双方向的な表現能力と文章による双方向的なやりとりを遂行する能力を区別した出題が行われることが明らかになった。このような出題ができるようになるのはパソコンを利用する新システムの利点である。

SIELE の運用は 2017 年からで、現時点では全世界で試験を実施するための準備が完全に整っておらず、受験可能な地域としてスペイン語学習者の多いブラジル、アメリカ合衆国、中国に受験会場が置かれる。他方で DELE は今後も従来通りに実施される。中南米の教育機関の協力を得ることから DELE よりも汎用性の高いスペイン語の語学力が問われる SIELE の今後の展開は注目に値する。

3. 新しい ELE 教育と今後の課題

ここまでで MCER と PCIC 以後のスペインの ELE 教育の新しい動向のふりかえりを試みた。スペインの ELE 教育の歴史の中で、MCER・PCIC が登場したこと自体が大きな変革と言えるが、MCER と PCIC 以前の時期、

すなわち前世紀と比較すると ICT 導入が ELE 教育に携わる教師や学習者、そして教育機関に相当の影響を及ぼしたことがわかる。もちろん、その影響はたいへいの場合以前よりはよくなったと思われることが多いのだが、やはり多少の課題はあるようだ。筆者自身の経験より指摘したい。

2015年12月下旬に Edinumen 社が ELE 教師のための通信講座 PDP ELE (= Programa de Desarrollo Profesional de Editorial Edinumen) を開講した。ネット環境があれば無料で受講可能で、この種の講座の受講経験に乏しい筆者もその仕組みを知りたいと思ったので参加した。全般的な感想としてはなかなかうまくできたシステムであると高く評価している。本稿2.1.3.で言及した Chema Rodríguez 氏が Edinumen 社の ICT 技術担当者の一人として登場する。テーマは大きく五つに分かれていて、各章三名の講師のレクチャーを Podcast と動画で受講する。そのあと出されたテーマについて掲示板にスレッドをたてたり、それにレスを返すという形で全世界の ELE 教師と意見交換を行う。Podcast は受講生がいつでも好きな時に聴くことができ、また掲示板へ書き込む時間などにも制限はない。システムとしてうまくできていると思ったのは、講師のレクチャーを聴いたあとでないと掲示板への書き込みができないことや掲示板に三つ意見を書き込まないとその章の最終課題にアクセスできないようになっていくということであった。ある章の最終課題をクリアしなくても次の章を始めることは可能で、ひとつひとつ課題をクリアすることによって自分がその章を何パーセント終えたか随時確認できるようになっているのも評価できる点であった。第1章の最初に登場した講師が本稿2.2.で言及し、現在 ELE 教育界でも注目されている Francisco Mora 氏であったことにも気分的な高揚を感じ、学習者のやる気をさりげなくそそるいい方法だと思った。

以上のように講座をふりかえるといいことづくしに思える。実際筆者はこの講座のアイデアについては高く評価していて、まさしく今の時にふさわしい授業形態で批判すべき点はないと思っている。しかし、筆者はこの講座を途中で挫折してしまった。その直接の理由は、いつでも自分の好きな時に自分のペースで視聴できるというこの講座のシステムの利点がかえってあだとなり、本職が多忙状態になると講座視聴をどうしても後回しにしてしまうことになったのがよくなかったようだ。いつでも視聴可能であっても毎日時間を決めて聴くべきであったと今は思っている。

もう一つ挫折の原因はこれも自分の個人的な理由であるが、Podcast で

講師の音声だけが聞こえてくるのをずっと聞き続けるのが苦手で集中力が10分も持たなかったことにある。各講師の話の長さはばらつきがあったが20分を超えるものもあり、せめて講師の姿だけでも画像で見えていたらもう少し聞き続けていられただろう。PCのディスプレイに講師の画像でも貼り付けておけばよかったかもしれないと今さらのように思っている。各講師の話がPodcastと動画の両方用意されていたのは、受講生にある時は聴覚のみを、別の時は聴覚と視覚の両方を使わせるのが目的であろうと推察している。

そして、掲示板での他の受講生との交流については三つ書き込みをしないと次の課題に進めないのが、やむなくやや的外れ、あるいは単に相手の書き込み内容に同意するだけで内容に乏しいレスポンスを書き込んでしまったこともある。そんなレスポンスでも書いて投稿すれば書き込みとしてカウントされるのである。掲示板のみならず、先にあげた講師のPodcastと動画も一回クリックすれば視聴したという印がつくので、実際には中身を視聴しなくても次のステップに進むことができる。ただし、各章の最終段階だけはきちんと終えないと修了の印がつかないようになっている。これについてもシステムを特に批判する意図はない。学習者がきちんと内容のあるレスポンスをすればいいというだけの話である。動画については観ることができたものは最終的にはすべて視聴した。

以上、このデジタル教材視聴と掲示板による受講生同士の交流というシステムを持ったこの講座を初めて受講し、多くのことを学んだ。一番役にたったと思うのは掲示板による意見交換である。受講生の大半は筆者と同じく世界のどこかの教育機関で働く教師らしいということが掲示板の自己紹介スレッドやお互いの意見交換の場での書き込みから推察されたが、皆が持っている意見やアイデアや経験は非常に多様性に富んでいて、書き込み内容は貴重な情報であふれていた。また、どれほどきちんと準備されたシステムであってもいろいろな理由で受講生に合わないということもあろうこともわかった。筆者の学生時代にはこういうスタイルの講座の存在は到底予想できなかったが、今後もICT技術はおそらくもっと進化すると思われる。今回は成功しなかったが、今後もこのような新しい世界にできるだけ意欲的に挑戦し、学習者を導いていきたい。

注

- 1) 「MCER および PCIC 準拠」と書いたが、両方とも外国語もしくはスペイン語教育についての規範書ではないので、拙文の趣旨はカリキュラム作成者や教材の著者がこれらの指針をもとに共通参照レベルに沿ったカリキュラムや教材を作成しているということである。
- 2) MCER の中では特に記述はされていないが、この第 6 章第 3 節で言及されている関係者の中に MCER の生みの親であるヨーロッパ評議会も含まれるべきであろう。同評議会の役割は言語政策の策定と推進であるが、同評議会が新規に定められた政策に従って教育機関は教育方針やカリキュラムを変える。すなわち、同評議会は直接学習者とは関わりを持たないが、間接的には影響を与えうる存在と言える。
- 3) Centro Virtual Cervantes の Enseñanza のサイトを参照。
- 4) ①から③までのイベントのうち①は Edelsa 社のサイトに開催内容が掲載されていたが2016年10月12日現在閲覧不可能で削除された可能性がある。②と③については参考ウェブサイトプログラムが掲載されている。
- 5) Rodríguez 氏はこの学習形態を英語の Blended learning で表現していた。スペイン語では el aprendizaje semipresencial と表現する。
- 6) 重田 (2013) を参照。日本でも注目されている授業形態である。スペイン語では la clase invertida と呼ばれる。この授業も英語の Flipped classroom で呼ばれることが少なくないようである。
- 7) 参考サイト「文部科学省 HP」を参照のこと。
- 8) あるいは juegoización, juguización と表記されることもある。
- 9) 例として Wikipedia 日本語版における「ヨーロッパ言語共通参照枠」の記述を挙げる。(2016年10月12日現在) 共通参照レベルや各言語の資格との比較のみが解説されている。

Wikipedia 日本語版「ヨーロッパ言語共通参照枠」
<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E3%83%A8%E3%83%BC%E3%83%AD%E3%83%83%E3%83%91%E8%A8%80%E8%AA%9E%E5%85%B1%E9%80%9A%E5%8F%82%E7%85%A7%E6%9E%A0> (最終閲覧日2016年10月12日)
- 10) 参考サイト ALTE Framework を参照。
- 11) SIELE 公式 HP によるとアルゼンチンのブエノスアイレス大学もこの試験の創設に関与した教育機関として名を連ねている。SIELE 新設の公式発表が行われた今年7月時点では同大学の名前はなかったため、その後加わったようである。
- 12) Cervantes.es に掲載された DELE と SIELE の比較記事を参照。

参考文献および参考サイト

江澤照美 (2010) 「スペイン ELE 教育事情報告—『ヨーロッパ共通参照枠』以後の ELE 教育教材について」『ことばの世界』第 2 号、愛知県立大学高等言語教育研究所、69–76.

Instituto Cervantes (2006) *Plan Curricular del Instituto Cervantes : Niveles de referencia para el español*, 3 tomos, Biblioteca Nueva.

http://cvc.cervantes.es/ensenanza/biblioteca_ele/plan_curricular/default.htm

Mora, Francisco (2013) *Neuroeducación. Solo se puede aprender aquello que se ama*, Alianza Editorial.

Ortiz, Tomás (2009) *Neurociencia y educación*, Alianza Editorial.

重田勝介 (2013) 「反転授業 ICT による教育改革の進展」『情報管理』Vol. 56, 677–684.

https://www.jstage.jst.go.jp/article/johokanri/56/10/56_677/_html/-char/ja/

ヨーロッパ評議会 [MCER 日本語版] (2004) 『外国語教育 II 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』、朝日出版社

http://www.dokkyo.net/~daf-kurs/library/CEFR_juhan.pdf

ALTE Framework

http://www.alte.org/attachments/files/framework_spanish.pdf

Álvarez, Pilar “El primer gran examen universal de español empieza el año que viene.”, *EL PAÍS.COM*, 3 de septiembre de 2016

http://politica.elpais.com/politica/2015/09/03/actualidad/1441290629_626355.html?rel=mas

Centro Virtual Cervantes — Cursos para profesores de español 2016

http://cfp.cervantes.es/actividades_formativas/cursos/default.htm

Cervantes.es “Servicio internacional de evaluación de la lengua española — SIELE”

http://www.cervantes.es/lengua_y_ensenanza/certificados_espanol/siele.htm

文部科学省 HP 「MOOCs の効用 Blended Learning (1) (2)」

「(参考) 反転授業 Flipped classroom」

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/004/gijiroku/_icsFiles/afiledfile/2013/08/26/1338978_06.pdf

SIELE 公式 HP <https://siele.org/>

XII Foro de profesores de E/LE (Universitat de València)

https://gallery.mailchimp.com/68677d17ae379d562fd9e532f/files/foro_ele_valencia_2016_brch_web.pdf (最終閲覧日 2016年10月19日)

XVI Encuentro práctico ELE Madrid

http://www.edinumen.es/images/stories/newsletter/xvi_encuentro/programa_xvi_encuentro.pdf (最終閲覧日 2016年10月19日)

Tendencias actuales de la enseñanza de E/LE

Terumi EZAWA

El tema principal de este ensayo es averiguar cómo ha cambiado la enseñanza de E/LE en España después de la publicación del *Plan Curricular del Instituto Cervantes* y saber la influencia de las TIC en la enseñanza de E/LE. Con este objetivo hemos hecho referencia al *Marco Común Europeo de Referencia*, el Centro Formación de Profesores del Instituto Cervantes, la enseñanza centrada en el alumnado y las nuevas evaluaciones. Y estos años ha habido más docentes que tienen mucho interés en la neurociencia para aplicar sus hallazgos al ámbito educativo.

En cuanto a los nuevos tipos de enseñanza, hemos mencionado el Blended Learning y el Flipped classroom. Esta nueva enseñanza tiene muchas ventajas, pero la desmotivación de los alumnos es todavía uno de los problemas que nos quedan.